

糸長浩司

1. まだ、大災害は続いている

人間の想像の限界を超えたのか、限界を意識的に無視し想像してこなかったという人間の限界、日本社会の限界か。あるいは、自然が無限界に人間社会を破壊することに対する対応システムを人間が創造できないということは無視して、それは無いものとして人間社会、社会システムを良しとしてきた近代文明の限界か。自然は時には人間を癒すが、時には、途方もない破壊と試練を人間社会に与える。この大災害を目にした時に、自然との共生という人間の都合の良い言葉が、中途半端な言葉として響くのは筆者だけではないだろう。

自然が突然の猛威をふるった結果として、多くの尊い命、長い年月をかけて創造してきた環境が一瞬のうちに消えた。突然、命を失った人達、今も避難生活で苦しむ人達の無念に対する慰めの言葉は見つからない。ただ、より前向きに、今も続く大災害に対して、災害に苦しむ地域住民の目線に立って、災害の現状の認識、被害状況、避難状況の調査、それらに基づく真摯な災害対策の提案、及びその後の的確で息の長い復興の歩みに向けた提案をしていくことが求められている。今続いている災害状況を如何に安定化させ、災害に直面している住民が安心と希望を持てる状況をどう作り出すのか。復興のビジョンと手法を、地域住民、基礎自治体の目線で、学術的、総合的な提案が学会に求められている。

大災害は今も続いている。避難民はまだ避難中であり、非日常的な生活の中にいる。落ち着いた復興の場をまだ提供されていない。海岸沿いの市町村は、被害が広域であり、上流域の市町村と連携した対応が十分に出来ないままである。広域的な市町村間でのペアリング的な防災対応、避難対応ができないことは、今回の大災害でも広域防災計画が発揮されていないことを意味しよう。

東京電力福島第一発電所の災害はまだ続いている。

30km 越える農村地域が放射能で汚染されつづけている。原発防災計画と対応施策が非常に不十分であり、今も、不安の中で暮らしている原発被害地域の住民が多くいる。原発難民は集団難民中である。筆者が20年近く村づくり支援をしてきた、福島県飯舘村の菅野村長と飯舘村住民の避難先の栃木県鹿沼市の総合体育館で会った時に、村長は、「まだ復興対策に取り組めない。こんなことは初めてだ」と苦悶する言葉を発した。今回の原発災害の困惑状態を象徴する言葉である。地震、津波であれば、壊れた後の復興計画、復興ビジョンについて考え、行動

をすぐにでも展開できる。飯舘村の再生、復興のシナリオはまだ明確に描けない。そして、避難像も描けない。

2. 三重大災害という「想定外」にどう立ち向かうか＝しなやかでレジリエンスなデザイン

「想定を超えた」という言葉が地震学者、防災研究者、原発関係者、建設関係者、政府が発している。これらの関係者の免罪符を求めるこの言葉は、国民に、科学、技術、政治、制度への不信感を抱かせる。設定条件を超えた自然の猛威に関して、緊急的な対応ができないでいる。津波、原発事故に関して、その大きさの想定と、それに伴う防災計画・設計条件が甘かったことが露呈しつつある。そして、その被害の甚大さと長期化を目にした時に、「想定を越えた」という免罪符は通用しない。

今回の大災害は、地震、津波、原発破壊・放射能汚染の三重災害であるが、農村現場ではそれぞれ災害内容は異なり、災害対応、避難対応、復興再生対応も異なる。地震の揺れでの建物崩壊、津波襲来による集落、町の一挙破壊と生活生産環境の崩壊、原発事故による放射線被曝による放射能汚染に伴う避難と生活・生産環境の汚染である。災害内容が重層化した、地震+津波+放射能汚染という福島県南相馬市のような場所もある。

このような災害内容のパターンごとに、一次避難、二次避難、その後の復興ビジョンとアクションも異なってくる。地震・津波災害に関しての復興は規模が異なるものの、歴史的教訓は多くある。災害の歴史から学ぶこと、応用することも多くあろう。その教訓を生かし、農村漁村の歴史的、風土的知恵を生かし、新たな再生プランの構築を描くことも可能であろう。ただ、今回の津波の被害は甚大で、元の場所での農村漁村の復興というシナリオが簡単に描けない地域も多々ある。

海岸線沿いは第一次産業的土地利用として、高台を居住地とする案が多く出ている。スリランカの津波で破壊された集落は、高台にエコビレッジとして再生された。重層的生活と生産環境構築のデザインが求められ、生活スタイルの変革も要求されよう。エコロジーで、バイオリージョン的で自立循環系の総合デザインが求められる。一方で、土木的な人工物でのより強固な防災計画が起こってくることも予想される。海岸線沿いに巨大な堤防を造り、それに守られた漁村、町の復旧は、また同じ想定外の被害をもたらす。自然の驚異をしなやかに受け止め、レジリエンス（柔軟な回復、弾性的回復）な再生デザイン

ンが求められている。

複合化、重層化した災害の復興ビジョンには、今までの農村漁村、都市のシステムの復旧ではなく、近代的、経済至上主義的価値観の大規模な転換が求められる。風土の文化と個性を尊重した上での、新しい価値創造、より自然と真摯に向き合い、しなやかに自然と向き合い、もう一度自然とともにあるライフスタイルの創造である。

### 3. 放射能汚染の農村の苦悶を乗り越え、災害対応ガバナンス、再生ガバナンスの構築を

福島第一原発の災害は天災ではない。大地震という天災をきっかけとした大人災である。人工物が持つ限界が露呈した。自然界には存在しない人工的な放射能物質に対する絶対的なコントロールは決してできないのにも関わらず、絶対という言葉による原発安全神話を創出し、邁進した結果としての大災害である。災害後の対応に関しての的確な防災計画とその実効性に関してのシステムができていないという最悪のシナリオで今、現場が混乱し、被災住民、農民は混迷している。「原子力施設等の防災対策」(原子力安全委員会)には、10kmを超える広域での放射能汚染、それも長期的な放射能汚染に関して、防災、災害対策がない。広域的な放射能汚染に対する防災計画がないと言ってよい。

筆者が長年村づくりに関わってきた福島県飯館村は、先の浦上報告にあるように、村の大半が30km圏外であり、政府の防災対策圏外となり、防災対応は、市町村長に任されている状況である。国は的確な情報を開示し、村が取るべき的確な指示もできないままに、放射性物質の汚染状況は進む。村は、真綿で首を絞められような落ち着かない状況で、日々、放射能汚染に怯えながら暮らしてある。一部の村民は自主避難、村の誘導での集団避難もしているが、まだ、半分以上の村民は村に留まっている。故郷を捨てられない、家畜を置いていけない、高齢者を置いていけない、原発難民となることも良ししない。その苦渋の選択の中にいる。

筆者ら飯館村後方支援チームは、京大原子炉実験所の今村先生達の調査によるデータを元に村の放射能汚染対策を緊急的に提言してきている。しかし、国の土壤調査結果等の開示がないまま、30km圏外であるために、何の損害保障も提示されないままの状態にある。汚染状況の的確な情報の開示とそれを元にした、多様な専門家達による評価と判断により、破綻している既存の防災計画を超えた対策を練るべきであるのにその動きは鈍い。

この状況は、「想定外」という事態の元で、想定システムが破綻しているのに、新たな超システムの対応ができない、硬直した状況にあり、システムが村を苦しめてい

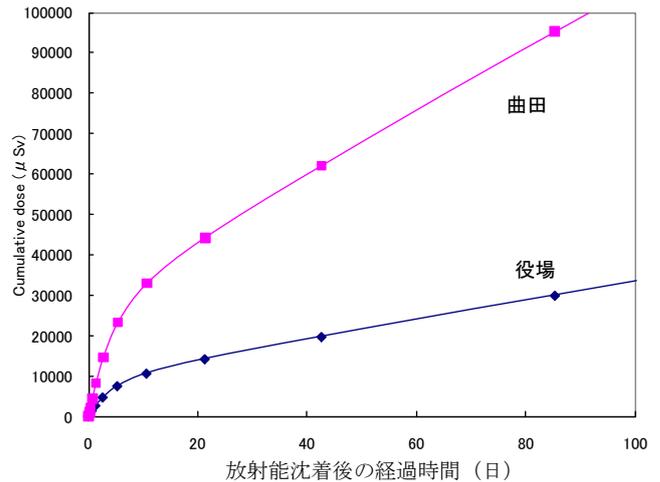


図1 飯館村役場と長泥曲田での積算線量推計図(μSv)(広大遠藤暁)

るという政治の問題である。重要な意志決定が「想定外」の元に放棄されている。あるいは、村民、国民を困惑させてはいけないために、不安を煽らないというために、正確な最新情報を出さない。最悪のシナリオを想定したリスクマネジメントをしないという、戦後の日本の統治システム(国-県-市町村-国民)、ガバメントの限界が露呈している。的確な情報を開示し、基礎自治体の首長、職員、専門家、村民を交えての、環境危機に対する、災害対応ガバナンスの構築が今こそ求められている。

表1 飯館村二拠点村100年構想案の一部(筆者提案)

#### ■ 0~3年

##### ★飯館村放射能汚染対策・再生協議会の設置

##### ①現在の飯館村の場所の部分定住?

徹底した放射能モニタリングによる汚染状況と立ち入り度合いの区分

村民の移住、定住者の区分(子どもとその家族の移住、疎開)、集落的対応

飯館村放射能汚染対策・再生協議会の設置と活動

土地所有権は維持するか、全村住民による持ち株制度での権利保持。新入会権の設定

##### ②新飯館村(分村)づくり/エコロジカルな村づくり

場所の確定と行政的仕組みづくり

福島県か山形県エリア。過疎山村対策を兼ねて。

エコロジカルな村として創造

放射能で汚染された村で、放射能と共存は可能なのか、共存するとした時の土地利用、暮らし像をどう描くのか、まだその再生ビジョンは見えない。出来ないとなれば長期的な移村、分村のビジョンが必至である。チェルノブイリの後の広域での土地利用計画、農村再生を超えた、新たな福島型農村再生ビジョンづくりが、放射能研究者、農村計画学者、プランナー、行政職員、村民を交えた再生ビジョン創造のためのガバナンスによって構築されることが求められている。